



福島成蹊中高一貫

学校通信

平成31年4月27日
平成31年度
第2号

生活の中のリベラルアーツ考

校長 本田 哲朗

平成も残すところあと数日になってしまったが、福島は何変わることもなく最も美しい時期を迎えている。つくづく思う事は、桜花の後に桃と梨とが続き、全く花が途絶えない事だ。また、芽生えにも重なり色彩の豊かさは、さながら印象派のそれを思わせる。同時に黄金週間が始まった。昨年までと大きく違うのは、天皇の即位そして慶事とも重なり日数が随分と増えた事にある。要らぬ心配とは思いますが、習慣となった学校生活のリズムを崩さない様に心がけよう。ともかく、生徒諸君は自己責任で後悔しない生活を送ろう。

さて、一貫教育の特色を際立たせる**教養教育の充実**への取り組みの二年目を迎えた。時代は移ろうが、変わらない本質とも言える“リベラルアーツ”の事である。この概念(?)が、言語化されたのは何時の事か解らないが、さかのぼるとヒトはそれを追いつけて来た感がいなめない。本校での狙いは、意識を持つ事による、視野の拡大と深化にある。例えば、私達の現実の生活は、考えるまでも無く種々様々な事が起きているのだが、目前にありながらただ流れているだけで、大切な事であっても見逃しがちになっている事が多い。少しの自覚と、視点を少し研ぎ澄ます事で、そう言ったことをとらえる事が出来ると思うからだ。2月のある研修会で、**P・ドラッカー博士**にまつわる話を聞いたのだが、生前ドラッカー博士が**マネジメント≒リベラルアーツ**だと言っていた事を改めて教わった次第である。

実際の教育に求められるものは、時代を違わず**広い視野を持つこと**、と将来に繋がる**高度の専門性**である事はまちがいない。従って、相互の関連性や異なる視点で物事を図る事を考えると、そう言ったモノを媒介する意味で**教養がとても大切になる**。また、本来の**教養の意味**は尽き詰まる所『**art & science**』ときくにおよび、ヒトの所業の総てを指すと言って良いかも知れないが、教養を身に付け、生かす事がリベラルアーツだと思うのである。

理屈はこれぐらいにして、リベラルアーツは元々非日常ではない筈である。むしろ私達の生活の中にあると思うのだ。例えば、連休をどう過ごしたらより良いもの出来るのだろうかと言った様に。何も連休だから、外で言われるそれに合わせて過ごす必要はどこにも見当たらない。むしろ、時間的制約の少ない環境の中で、いかに自分で時間管理をし、生活をコントロール出来るかだと思うのだ。換言すれば自己マネジメントと言えるかも知れない。結果的に、「普段より楽しく勉強する事が出来た。」とか、「時間を不均等に配分し、その工夫で弱点が解消できた。」…なんていうのもイイ。基本は生活の中心に自分が存在している事、また、その生活の主体が常に自分である事が大切だ。それで、その事が実感の伴うものである事も大切な要素だ。言わばリベラルアーツは、生活のクオリティーに置き換えると解りやすい。質の高いモノほど、ジャンルを問わず、ヒトに満足を与えると思うのだ。そもそも、それを理解出来るのも、ある意味ヒトがヒトたる所以なのだから。

